

中国古典と教養

——言語生活の一側面——

藤 川 正 数

はじめに

批林批孔運動に関するいくつかの論説を読んでいて、妙なことに気がついた。というのは、孔子を批判しながら、実は孔子たちも盛んに用いた伝統的な手法が用いられているからである。批林を説くのに批孔と結びつける、いわゆる故事を用いる手法は、古くから慣用されてきたことである。例えば、韓非子に次のような意味の文章がある。

もしも君主がその本心を包まず、真情のちょっとした動きでも見せたならば、そのため臣下がつけ入って君主を侵すことになり、そうなると、かれらが子之・田常になるのはいと易いことだ。(韓非子、二柄)

この場合、「子之・田常になる」と言ったのは、前の文中に語られた故事——燕王子噲が子之から国を奪われ、齊の簡公が田常に殺されたという事例——を受けて言ったものである。したがって、ここにいう「子之」とか「田常」とかいう語は、歴史的な人物としての個性を捨てた抽象的な意味に使われているのである。

このように、故事を借りて間接的に表現する手法が行われるについては、そういう故事は誰でも知っているということが前提とされている。したがって、そういう表現の世界に加わるためには、一種の古典的教養とでもいうべきものを持っていなければならない。本稿は、主として中国古典について、古典的教養の一側面として、ことばのやりとりの上でどういう役割を果たしたかについて考えてみようとするものである。

1. 古典的教養

枕草子の中にある次の一段は、有名な話である。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峰の雪いかならん。」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ。人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、此の宮の人には、さべきなめり。」といふ。

この場合、「香爐峰の雪いかならん。」という皇后のことばが、白氏文集の「香爐峰雪捲簾看」という句を踏まえていることは言うまでもない。少納言に向かっこのうことばをかけられた皇后の意図は、「簾をあげさせて雪景色を見たい」という所にあるのだけれども、そのことを直接には言わず、「香爐峰雪」という上の四言だけを出して、「捲簾看」という下の三言を、聞き手におしはからせようとされたのである。果して少納言は皇后の意にかなった行動がとれたので、皇后も満足せられ、い合わせた女房たちも感心したという次第である。さて、このように、話し手が直接には述べないで、間接に言い表わそうという手法は、枕草子の作者自身のことばの中にも見られる。それは、第82段（二月つごもりがた、いみじう雨降りてつれづれなるに、云々）である。頭中将齊信が使者をよこした。「蘭省花時錦帳下」と書いて、その下の句を答えよと言う。「これが末を知り顔に、たどたどしきまん書きたらむも、いと見苦しと思ひまはす程もなく」、使者があまりに返事をせきたてるので、炭櫃に消え残った炭のあるのを取って、「草のいほりを誰か尋ねむ」と書いてやった。ことばをかけた頭中将としては、「蘭省花時錦帳下」の次に置かれた「盧山雨夜草庵中」という句が、「いみじう雨降りてつれづれなるに」というその日の天候や雲囲気によく合うので、それを言わせようとして、「蘭省花時錦帳下」という上の句を持ち出したのである。これを受けて、少納言は、下の句は勿論よく知っているけれども、しかし、物知り顔に漢詩の句をそのまま書くのをみっともないと思い、結局、漢詩の代わりに、それと共通した気持の含まれている歌の句を以て答えたというのである。「蘭省花時錦帳下」という上の句は、白楽天の友人が今も尚書省に職を奉じて廷臣の榮譽に輝いているというので、遠く都のさまを思いやっている。それに対して、下の句「盧山雨夜草庵中」は、「自分は、いま左遷せられ、盧山のふもとに草の庵を結びわび住まいをし

ているのに、夜中じゅう雨が降りつづいて、まことに物さびしい限りだ。」という気持を表わしている。この下の句の心情によく似たものを含む「草のいほりを誰か尋ねむ」という句を借りて、漢詩句の代わりをさせたわけである。

「香爐峰雪」にしても、「蘭省花時」にしても、上の句によって下の句を連想させようという手法である。ところで、こういう手法は、中国で古くから行われてきたことである。その一例を挙げてみよう。前漢の哀帝に仕えて尚書省の長官となった鄭崇という人は、訪問客が多くて門前市をなすというほどであった。ある時、帝が「卿(なんじ)が門は、何をもって市の如くなる。」と問われた。すると、鄭崇は答えて言うことには、「臣が門は市の如し。臣が心は水の如し。」と。「水の如し」というのは、莊子の中にある「君子の交は、淡きこと水のごとし。」という文句を踏まえたものであって、鄭崇の言いたいことは、申すまでもなく、上の句の「君子の交にして淡し。」という所にある。それなのに、「淡し」と言わないで「水の如し」と言ったのは、上の句によって下の句を連想させようという手法なのである。

これとは少しちがって、特殊を以て一般を類推させようという手法もある。同じ枕草子の中でその例を挙げると、「斧の柄も朽ちる」ということばを使った所(74段)がある。主人がちょっと立ち寄った先で、坐りこんで急には帰りそうもないのを、供なるおのこや童などが、なんのくんとの中をのぞき、様子を見ては、とても時間がかかりそうだ、というので長々とあくびなどする場面で、「斧の柄も朽ちぬべきなめり。」と書いてある。これは、述異記という小説に載っている「爛柯」の故事——晋の王質が石室山へ木を伐りに行き、仙童が囲碁するのを見ている間に斧の柄が朽ち、驚いて家に帰ってみると、知人はみな死に絶えていた。——を踏まえたものである。ここでは、「斧の柄の朽ちる」という現実具体的な現象とは関係なく、長い時間が経過することに喩えたものである。この場合、供の者から見ればうんざりするほどの長い待ち時間だけれども、本人は興に入って時のたつのも忘れてその場の様子に、いかにもよく適合している。

ところで、こういう手法も中国で古くから行われてきたことである。その一例を挙げてみよう。晋の孫楚という人が若い時に、隱遁生活に入りたいと思

い、同郷の友人の王済に向かって、「石に枕し流に漱がんと欲す。」と言うべき所を、誤って、「石に漱ぎ流に枕す」と言ってしまったという話は、「漱石」の出典となった有名な話である。さて、「枕石漱流」という語は、三国蜀志の彭義伝にも見え、「俗塵を避けて隠遁生活をする」意味に使われている。この場合、孫楚の言いたい気持は、「隠居せんと欲す」という所にあるのだけれども、それをまともには言わないで、「石に枕し流に漱がんと欲す。」と言ったのは、もともとある特定人物の生活ぶりを喩えた「枕石漱流」という語を借りて「隠遁生活」という一般的な意味に使ったものである。

以上、「香爐峰雪」や「蘭省花時」のように、上の句によって下の句を連想させるにせよ、あるいは「爛柯」の故事によって長い時間の経過することを類推させるにせよ、どちらにも共通なことは、直接には述べないで、古典の語句に代わって物言わせ、そうすることによって婉曲優雅に表現しようとする所にある。そして、このような表現手法をとるためには、聞き手なり読み手なりにそれ相応の教養がなければならない。「香爐峰雪」の場合、人々が言った「此の宮の人には、さべきなめり。」ということばの中に、当時の人々のそういう意識がよくうかがわれる。〔この宮の女房として〕「相当な（さべき）方」という所にポイントがある。単に白氏文集をそらんじているという博識だけではなく、とっさの間に合うことのできる適応性、それはいわゆる一般的教養として求められる要素の一つにも適合するように思う。次に大事なことは、このような古典を媒介とする間接的な表現手法を、直接的な表現手法よりも美しいものと意識していたことである。「草のいほりを誰か尋ねむ」という歌の句を借りて、「廬山雨夜草庵中」という詩句の代わりをさせたといっても、それは通常の場合、ほん物が間に合わないので代用品で事を足そうというようなのは、意味が異なる。「これが末（下の句）を知り顔に、たどたどしきまんな書きたらむも、いと見苦しと思ひ」という所に、漢詩句の代わりに和歌の句を用いる積極的な意味が、作者にはっきりと自覚されている。要するに、当時の宮廷生活の中では、詩歌などの古典は、必須の教養となっていたことがわかるのである。

このように、古典に代わって物言わせる手法は、おそらく中国で古くから行

われた「断章取義」から来たものであろう。断章取義とは、作者の本意、詩文全体の意味にかかわらず、その中から自分の用をなす章句を適宜抜き出して用いることである。

2 断章取義

儒家は、古典の学習を非常に重要視していたが、論語の中にも詩〔経〕の学習についての問答が多く見られる。孔門の中には、詩三百篇を暗誦するというような熱心な学生もいたようである。先生がある時次のように言われた。

詩経の三百篇を暗誦していても、それに政務を与えても通じが悪く、四方の国々へ使いに行っても一人で対応できないのでは、たとい〔暗誦が〕多くとも何の役に立とうか。（論語、子路）

これは、外交使節などが折衝の場合、ことばのやりとりに詩を活用することを指したものである。また、孔子の息子の伯魚が庭を通り過ぎようとした時、孔子が、「詩を学んだか。」と言ったので、伯魚が「いいえ。」と答えると、「詩を学ばなければ立派にもの言えない。」と言われたので、それから伯魚は詩を学んだということである。このように、詩を学ぶ目的の中に、ことばのやりとりに活用するためということが大きく考えられていたのである。当時、大使たちがことばのやりとりに、詩をいかに活用したかの様子を、左伝によって次に紹介してみよう。

魯が莒を伐って領土を侵略した。ちょうどその時、列国の会議が號で開催されていたので、魯国を代表して出席していた大臣の叔孫子に対して、制裁を加えようという議が起こった。それを晋の趙武が弁護して、叔孫子は死刑を免れることができた。さて会盟が終った後、趙武と叔孫子と曹の大臣（姓名不詳）との三人で鄭の国に立ち寄った。そこで鄭の君主簡公が、この三人を公式に接待することになる。儀礼的な手続として、主人側を代表して鄭の大臣罕虎がまず客の所へ行って日どりを予告する。三人の客のうち、最初に趙武の所へ行った。趙武は、一応の用むきが終った後で、「瓠葉」という題の詩を賦した。賦とは、歌わないでそらんじることである。次に、客の叔孫子の所へ行き、同じく用談を済ませた後、さっき趙武が「瓠葉」の詩を賦したことを告げた。なぜ

告げたのか、左伝には何とも書いてない。罕虎が、まさか「瓠葉」という詩の心をつかみかねて教えてもらおうというつもりでもあるまいけれども、叔孫子は教養の豊かな人なので、叔孫子はどう解するかを、念のため確かめておきたかったのかも知れない。ともかく、そういう話を罕虎から聞いて、叔孫子が言うには、「それでは、趙武は一献の礼を希望しているのです。そのようにしてあげるのがよいでしょう。」と。この場合、「瓠葉」の詩には、「ひさごの葉というような粗末な物でも、酒の肴にして客をもてなすことはできる。」という意味の文句があるので、そこから一献の礼（極めて質素なもてなし）を希望していることがわかるのである。ところが、主人側の罕虎は趙武の意向を無視して、五献という手厚い接待の準備をしておいた。趙武がこれを見つけて、五献などはとんでもないことだと言って、固く辞退する。そして鄭のいま一人の大弟子産に耳うちして、「わたしは、先日、貴国の首席大臣である罕虎に、ちゃんと一献の礼をお願いしてあったのですのに。」とささやいたと書かれている。実は、先日趙武が罕虎に会った際、自分が受ける接待の内容について具体的なことは何も告げていない。ただ「瓠葉」の詩を賦しただけである。にもかかわらず、それでもって一献の礼をお願いしたのだと趙武が意識していたことが、子産への私語によって明白にうかがえるのである。

そんないきさつもあったが、ともかく公式の賓礼が終り、その後で宴会になった所で、こんどは叔孫子が「鵲巢」の詩を賦した。すると、趙武が、「不堪——とんでもありません。」と挨拶する。「鵲巢」の詩を賦しただけなのに、それを受けて、趙武はなぜ「不堪」という挨拶をしたのであろうか。「鵲巢」には、「鵲が巢を作り、鳩がこれに住まう。」という文句がある。叔孫子は、この句を借りて、「趙武がいろいろと骨折ってくれて、そのおかげで私も刑罰を免れることができました。」ということに喩えて、感謝の気持を表わしたのである。叔孫子のそういう心がわかったからこそ趙武が「不堪」と応えたわけである。こんどは、罕虎が「野有死麋」という詩を賦した。そこには、「^ぎ龍をして吠えしむるなかれ。」という文句がある。それを受けて、趙武は「常棣」の詩を賦し、かつ「野有死麋」の詩に「^ぎ龍をして吠えしむるなかれ。」という文句があるのにちなんで、「我ら兄弟の国が親しみ安んじたならば、むく犬に吠え

させないようにすることができるでしょう。」と挨拶した。すると、叔孫子と罕虎と曹の大臣との三人が起立して杯を挙げ、「子（趙武）のおかげで難を免れることができるというものです。」と言って、酒を飲み楽しいひと時を過ごした。「常棣」の詩には、「兄弟牆に闚げども、外その侮りを禦ぐ。」という句があって、兄弟仲よくすべしという意味が含まれている。この場合、むく犬に喩えられた楚は異姓であるのに対し、いまこの宴席に集まっている主人側の鄭は申すまでもなく、客側の晋も魯も曹もみな同姓（姫）つまり兄弟の間がらである。そういう場所と雰囲気になさわしく「常棣」の詩が出てきたので、期せずして乾杯となった次第である。以上は、社交的儀礼としてのことばのやりとりの中で、古典としての詩を活用した例である。次に、儀礼的でもあるが同時に政治的な折衝に当るような事からも、賦詩を利用してとり決めた例を挙げてみよう。

春秋五霸の一人として有名な晋の文公が、公子の身分で他国を遍歴中、しばらく秦に滞在していた時のことである。秦君の穆公が、ある日、公子（名は重耳）を宴に招いてもてなすことになった。招かれた公子が、臣の子犯に介添えを命ずると、子犯は辞退して、「私よりも趙衰のほうが文辞に長じていますから、どうぞ衰にお命じください。」と言った。さて宴会の途中で、公子の重耳が「河水」の詩を賦して礼を述べると、穆公は「六月」の詩を賦して返礼した。すると、介添えの趙衰が、「重耳よ、君の賜物に拝礼をしなさい。」と言った。そこで公子は堂下に下って拝礼し、稽首（頭を地につけて敬礼する、最も重い礼）した。穆公は階段を一つ下って、公子の礼を辞退する。すると、趙衰が、「秦君には、諸侯が天子を助けまいらせる意味の歌を賦して、重耳に聞かせ賜りました。重耳といたしまして、このようにお礼申さずにはおれませぬ。」と言って挨拶した。

この場合、重耳が「河水」の詩を賦したのは、河の水が海にあつまり流れこむのに喩えて、諸侯がみんな秦に帰服する意を寓し、秦の徳望をたたえたものである。「六月」の詩には、周の尹吉甫が宣王を補佐して功績をあげたという意味の文句があるので、これを借りて、公子が晋に帰ったならば、きっと王国をただすような名君となるであろうという意を表わしたものである。ここまで

は、重耳が穆公の徳をたたえたので、穆公も重耳の人物をほめて、「きっと晋に帰って即位し、立派な君主になれるでしょう。」と返礼したもので、儀礼的なやりとりという感じがする。それを受けて、すかさず趙衰が、「重耳よ、君の賜物に拝礼をしなさい。」と言って、堂下に拝稽首させた所には、政治的な色彩が強く感ぜられる。つまり、「『六月』の詩をありがたく頂戴いたしました。」という儀礼によって、重耳が晋に帰国して即位できるように、秦が援助してくれるという約束をとりつけたのである。更に趙衰が、「秦君には、諸侯が天子を助けまいらせる意味の歌を賦して、重耳に聞かせ賜りました。重耳といたしまして、このようにお礼申さずにはおれませぬ。」と挨拶したのは、その約束を一層強固なものにさせる効果をねらったものと解される。杜預がこの所に注して、「明年秦の穆公が重耳を助けて晋に入国させる張本である。」と言ったのは、そういう意味である。このように、古典としての詩を利用して、話し手の心を婉曲に言い表わしたり、相手の賦した詩の心を読みとって適切な応答や処置をとるためには、詩についての深い教養が必要となる。最初、介添役を命ぜられた子犯が辞退して、「吾は趙衰の文なるにしかざるなり。」と言った「文」とは、主としてこのような古典的教養を指して言ったものである。

結 び

以上、二つの節に分けて述べた所を要約してみると、次のようになる。①枕草子の中に、話し手が直接には述べないで古典の語句に代わって物言わせようという手法がしばしば見られる。しかも、このような古典を媒介とする間接的な表現手法のほうが、直接的な言い方よりも美しい、そしてより効果的な表現手法であると意識されていた。②古代中国の人々は、古典としての詩を、ことばのやりとりの中で活用できることは、教養ある人々の重要なたしなみと考えていた。また実際に、社交や外交折衝の場で、詩をいわゆる断章取義によって引用し、優雅でしかも効果的な表現手法として活用した事例が数多く見られる。してみると、枕草子の中に見える「古典を媒介とする」表現は、踏まえている語句や故事が中国古典から借用されたばかりでなく、そういう手法そのものも中国古典に学んだものであろうということが考えられるのである。